2019.5 No.42

たてやま おらがんまっち

南総祭礼研究会

館山市神戸地区 中里

地域の自慢

太平洋を望む平砂浦に注ぐ巴川の河岸段丘に展開する地区です。

里見氏以前の有力武士がいたとされる室町時代作の「天田やぐら」と言われる4基のやぐらや、五輪塔などが残されており、八坂神社の別当寺である「金蓮院」のまわりの小字名には、寺にまつわる字名「塔の下」「塔〆」などがつけられています。

農業を営むなか、田畑が少ないため、漁師の手伝いをするなどの「半農半漁」や、外へ勤める人が多く、昭和六十二年に安房地域で初めて開設された知的障害者施設「中里の家」を区民で温かく見守っています。

毎年八月九日に行われる祭礼に向けて、一月二日の青年団が主となる「歌い初め」、十三日の「十三日こもり」、二月十四日の区民総出の「おびしゃ」、十一月二日の「日待ち」などのたくさんの行事を、四十二世帯ほどの人々で継承している自慢の地域です。

自慢の神輿

中里区の神輿本体の近年の調査の折に、神輿胴体内に明治三十年の墨書きがあることがわかりました。

そこには当時の役員面々の名前と一緒に

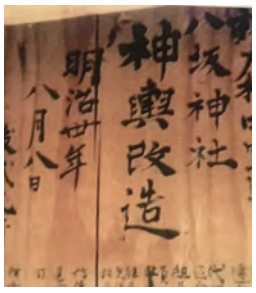
「神戸村中里区
八坂神社
神輿改造
明治卅年
八月八日
祓式執行
北条町北条
大　工　羽山権之助
彫刻師　後藤利平義光
北条町長須賀
金物師　滝川嘉吉
冨崎村相濱
塗　師　中村清次郎」

と書かれています。

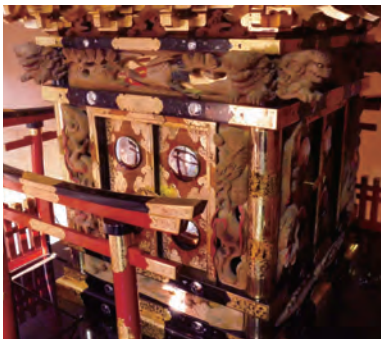
この墨書きには「神輿改造」の文字が見えることから、中里区では明治三十年以前から神輿を持っていて、その神輿を明治三十年八月に大工、彫刻師、金物師、塗師が関わっての大幅な修理あるいは改装が行われ、今に伝わっていると思われます。

神輿本体は小ぶりながら、塗りや金物も美しく仕上がられていて、それぞれの場所に後藤利兵衛橘義光の彫刻がきっちりと納まっているバランスのとれた風格のある自慢の神輿です。

- 屋根：延屋根方形一直線型
- 蕨手：普及型
- 造：塗神輿
- 露盤：桝形
- 胴の造：平屋台
- 舁組：五行三手
- 扉：四方扉
- 鳥居：明神鳥居
- 台輪：普及型
- 台輪寸法：3尺6寸6分
- 神輿製作：明治30年（1897）
- 彫刻師：後藤利兵衛橘義光（83歳）
- 大工：北条町北条・羽山権之助
- 金物師：北条町長須賀・滝川嘉吉
- 塗師：冨崎村相濱・中村清次郎



神輿内面の墨書き



きっちりと納められた後藤利兵衛橘義光による彫刻

企画：南総祭礼研究会　お問い合わせ：南総祭礼研究会（TEL.090-1531-5307）